災害復興医療人類学研究所
所長　辻内琢也（人間科学学術院 教授）

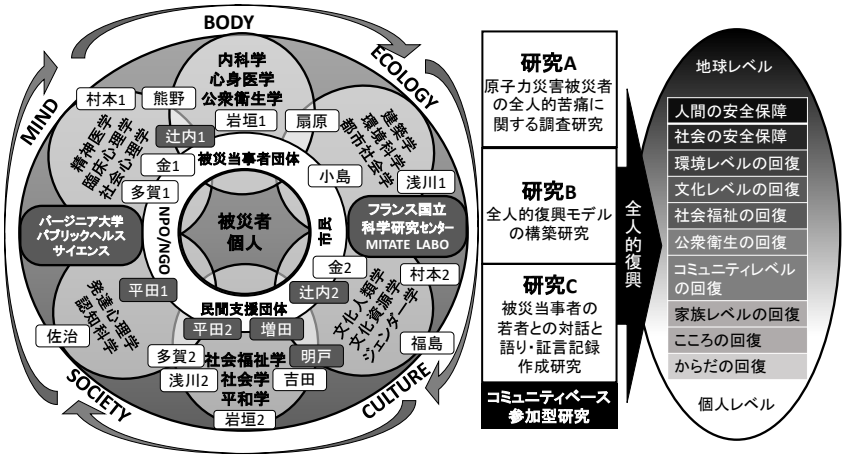
研究活動概要

・科研費・基盤(B)のスタート

本研究チームで獲得した、科学研究費助成事業・基盤研究(B)（2025～2029 年までの 5 年間）が始動した。

研究科題名：「原子力災害被災者の全人的復興モデル構築に向けたコミュニティベース参加型研究」（課題番号：25K00726）

【図1】 原子力災害被災者との対話による「全人的復興モデル」の構築に向けたコミュニティベース参加型研究



研究の概要：本研究の目的は、コミュニティベース参加型研究 (Community-based participatory research)により、身体的・心理的・社会的・経済的な「全人的苦痛」を負っている国内避難民・原子力災害被災者を対象に、からだ・こころ・家族・コミュニティ・社会・文化・環境の回復を支える、body-mind-society-culture-ecology を包含した「全人的復興」モデルを構築することである。3 つの研究チーム（[研究 A]原子力災害被災者の「全人的苦痛」に関する調査研究、[研究 B]「全人的復興モデル」の構築研究、[研究 C]被災当事者である若者との対話と語り・証言記録作成研究）を組織し、インタビュー調査、フィールドワーク調査、大規模アンケート調査をもとに人間科学に基づく量的・質的混合研究法を用いる。国際的な連携として、バージニア大学パブリックヘルス・サイエンスの Nao Hagiwara 教授と、フランス国立科学研究センターMITATE Labo 共同代表のセシル=浅沼 ブリス教授と共同研究を実施する。本研究チームは 2011 年発災当時から原子力災害被災者の支援を目指した研究に取り組んできており、本課題にてさらなる研究の発展と社会への還元を目指す。

・定例研究会の実施

研究所研究員・招聘研究員、および各研究室所属学部生・大学院生による研究報告とディスカッションを行った。報告者と報告内容は下記の通りである。

・第 1 回（2025 年 4 月 22 日）：辻内琢也（所長、早稲田大学人間科学学術院教授）、池座雅之（NHK 仙台放送局）「『NHK スペシャル』『東北ココカラ』に向けた大規模アンケート調査項目作成会議」

・第 2 回（2025 年 5 月 27 日）：平田修三（招聘研究員、仙台青葉短期大学子ども学科准教授）、辻内琢也（所長、早稲田大学人間科学学術院教授）「被災当事者である若者との対話と語り・証言記録作成研究、書籍出版の企画会議①」

・第 3 回（2025 年 6 月 24 日）：竹沢尚一郎（国立民族学博物館・総合研究大学院名誉教授）「被傷性＝脆弱性の生―政治（特に原発事故後の人類学的災害研究）」

・第 4 回（2025 年 7 月 22 日）：増田和高（招聘研究員、武庫川女子大学文学部准教授）、明戸隆浩（大阪公立大学経済学部准教授）「被災当事者である若者との対話と語り・証言記録作成研究、書籍出版の企画会議②」

・第 5 回（2025 年 8 月 26 日）：萩原奈緒（招聘研究員、バージニア大学公衆衛生学部教授）「人種差別をテーマにした社会心理学・公衆衛生学的研究の紹介」

・第 6 回（2025 年 9 月 23 日）：村本邦子（招聘研究員、立命館大学教授）「被災当事者である若者との対話と語り・証言記録作成研究、書籍出版の企画会議③」、辻内琢也（所長、早稲田大学人間科学学術院教授）「NHK/WIMA 共同調査結果の報告①」

・第 7 回（2025 年 10 月 28 日）：明戸隆浩（大阪公立大学経済学部准教授）「NHK/WIMA 共同アンケート（自治体版）自由記述の計量分析から」、石黒駈・占部悠人・平野太智・小谷周（辻内研究室学生）「被災当時小学生だった若者達との対話から学ぶ：事例検討会」

・第 8 回（2025 年 12 月 23 日）：吉田耕平（研究員）、堀川直子（招聘研究員）「被災当事者である若者との対話と語り・証言記録作成研究、書籍出版の企画会議④」

・第 9 回（2026 年 1 月 27 日）：辻内琢也（所長、早稲田大学人間科学学術院教授）「原発事故型 PTSD の分析」、小野寺よし子（辻内研究室学生）「NHK/WIMA 共同調査：ゼミ生たちと実施した自由記述 KJ 法分析結果」、平田修三（招聘研究員、仙台青葉短期大学子ども学科准教授）「被災当事者である若者との対話と語り・証言記録作成研究、書籍出版の企画会議⑤」

・第 10 回（2026 年 2 月 24 日）：外山佳史（辻内研究室学生）「原発事故が生み出した『棄民』に認められる構造とその解決策」、平田修三（招聘研究員、仙台青葉短期大学子ども学科准教授）「被災当事者である若者との対話と語り・証言記録作成研究、書籍出版の企画会議⑥」

・第 11 回（2026 年 3 月 24 日）：中村光江（招聘研究員、図書印刷株式会社）「被災当事者である若者との対話と語り・証言記録作成研究、書籍出版の企画会議⑦」

・シンポジウム“復興の人間科学 2025”の開催

福島原発事故 14 年の経験から学ぶ

～当時小学生だった若者たちとの対話と、NHK 共同調査の結果から～

➡https://wima.jp/

◆2025 年 11 月 29 日（土）

◆早稲田大学・早稲田キャンパス 22 号館 201 教室／ハイブリッド開催

◆主催：早稲田大学災害復興医療人類学研究所（WIMA）

◆大会長：辻内琢也、実行委員長：平田修三

［第 1 部］　当時小学生だった若者達との対話から Vol.4

①企画趣旨：平田修三（仙台青葉学院短期大学准教授）

②早稲田大学人間科学部学生による事前インタビュー結果・考察

③被災当事者の若者による発表

④WIMA 研究者・教員名によるコメント：堀川直子、浅川達人、佐治伸郎

［第 2 部］　パネルディスカッション①：平田修三（司会）

テーマ 1．原発事故 14 年の経験の意味・意義を考える

テーマ 2．若者達による日本社会・国際社会への提言

［第 3 部］　NHK/WIMA 被災者アンケート調査の報告

①調査概要（山本裕子：辻内研究室 e-school4 年）

②複雑性 PTSD について（辻内琢也）

③都市社会学の立場から（セシル・浅沼＝ブリス：MITATE ラボ教授）

④：自由記述のテキスト分析（明戸隆浩：大阪公立大学准教授）

⑤：自由記述の KJ 法分析（小野寺よし子：辻内研究室修士 1 年）

⑥：孤立孤独について（岩垣穂大：亜細亜大学専任講師）

⑦：電話相談事例から（萩原裕子：こころと法のつながり相談室）

［第 4 部］　パネルディスカッション②：増田和高（司会）

指定討論者：原口弥生（茨城大学教授）、筒井雄二（福島大学教授）、

森松明希子（東日本大震災避難者の会 Thanks＆Dream 代表）

・NHK &WIMA 共同大規模アンケート調査の実施

原発事故 15 年に向けた NHK 番組「東北ココから」「ETV 特集」における放映を目指して、原発事故による「被害の総体」を明らかにするための大規模アンケート調査を実施した。2025 年 7～8 月に福島県被災

13 自治体および全国 29 支援・原告団体の協力を得て 31,818 世帯に身体・心理・社会・経済的状況を問う調査用紙を配布し 3,493 件（回収率 11.0%）の回答を得た。回答者のうち、現在も約 4 割の者が避難生活を継続させており、3 人に 1 人に PTSD（心的外傷後ストレス症）の疑いがあるという深刻な実態が浮き彫りとなった。特に、経済的困窮や地域社会での孤立、賠償問題を巡る問題などが被災者の精神的苦痛を長期化させる要因になっていると考えられた。この結果から、復興の裏で複雑化・長期化する心のケアと社会経済的ケアの必要性を指摘した。なお本調査の成果は、NHK にて放映された。

・主要な研究業績

- **・明戸隆浩**：ヘイトスピーチ概念の悪用に抗する．現代思想 53(6)：152-163，2025.05
- **・明戸隆浩**：新しい否定論の時代 ：「被害者と加害者の転倒」がもたらす世界．世界（1002)：179-187，2026.02
- **・Cécile Asanuma-Brice**： La politique de reconstruction à Fukushima : lorsque reconstruire détruit. Cohabiter, Les Réclusiennes : 212 p., 2025, 978-2-919539-41-3. ⟨hal-05548402⟩
- **・Hagiwara, N.**, & Mende-Siedlecki, P. (2025). How can psychologists walk the walk to promote racial justice? Situating racial justice intervention research within the translational research framework. *Journal of Social Issues, 81*(3), e70019.
- **・増田和高**，畑亮輔：要介護等高齢者による家族介護者への DV 行為の実態とケアマネジャーによる支援に関する研究．地域ケアリング 28(2)：64-68，2026.02
- **・村本邦子**：集合記憶と集合トラウマ：周辺からの記憶－被災と復興の証人となる．N:ナラティブとケア 17：80～85，遠見書房，2026.01
- **・村本邦子**：死者と共同体－東日本大震災後を生きる．東洋英和女子学院死生学年報：75-93，2026.03

特に有意義と考える活動、成果等

・NHK にて研究成果が紹介

①東北ココから “歳月に埋もれた声”をたずねて

◆放送日：2025 年 9 月 26 日(金)

◆概要：東京電力福島第一原発の事故から 14 年半。いまなお避難生活を続ける人は 2 万人を超える。今回私たちは、その生活実態や心の状態を把握するために大規模なアンケート調査を実施。3,000 人を超える人から回答を得た。その結果、3 割超が今なお高いストレス状態にあることが分かった。さらに、1 人 1 人を訪ねてみると、社会の無関心や周囲の無意識な言葉の暴力が避難者たちを追い込んでいったという切実な実態が浮かび上がってきた。

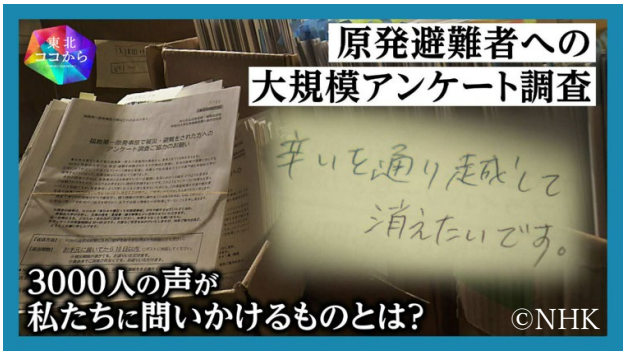
②ETV 特集 “歳月に埋もれた声”をたずねて 福島・原発避難者の 15 年

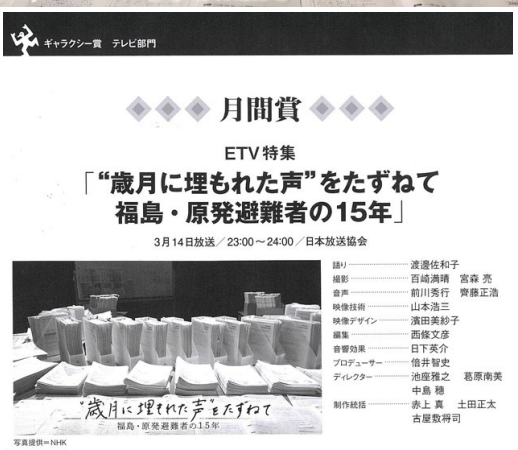
◆放送日:2026 年 3 月 14 日（月）

➡https://www.nhk-ondemand.jp/goods/G2026155414SA000/

◆概要：今回、私たちは 2011 年の原発事故で避難を経験した福島の人たちを対象に大規模なアンケート調査を実施し、3,000 件を超える回答を得た。NHK・WIMA の共同で分析を進める中で、原発事故の影響が長期に及んだからこそ表れる被災者たちの深いこころの状態が浮かび上がってきた。さらに、賠償金をめぐって避難先の住民から向けられたさまざまな声が、避難者たちを精神的に追い詰めてきた実態も明らかになった。

この特集は、『ギャラクシー賞』2026 年 3 月度「月間賞」に選出され、さらにテレビ部門の年間賞にもノミネートされた。ギャラクシー賞は、民放・NHK を含むテレビ業界で高い権威と歴史をもつ賞として知られている。





その他の活動、成果等

・（国際学会）第 74 回米中西部アジア研究学会（於：オハイオ州立大学）に基調講演者として招待

Takuya Tsujiuchi: Why Did Severe Discrimination and Prejudice Occur after the Fukushima Nuclear Disaster？Questioning the Underlying Social Structural Violence. *Midwest Conference on Asian Affairs 74th Annual*、 2025、 The Ohio State University. 2025.10.10～12

<Summary>

Following the Fukushima Nuclear Disaster, severe discrimination and bullying have been tormenting the victims. This is a problem that could not have arisen from natural disasters such as earthquakes and tsunamis. Initially, the main claim was that “radiation is contagious,” but later, the prejudice that “they are living luxuriously on compensation money” spread. We conducted a joint survey with NHK in 2025, and found that 56% of the 2,200 respondents reported having unpleasant experiences due to being evacuees or disaster victims. Furthermore, 55% reported feeling reluctant to tell local residents that they had evacuated or relocated due to the nuclear accident. The division and conflict among people in areas affected have become a major problem. This phenomenon stems from a societal trend that emerged around the time of the Tokyo Olympics, where the nuclear accident was treated as a thing of the past and radiation contamination was deemed eliminated and safe. This presentation aims to reveal, through anthropological research, the social structures that caused discrimination and prejudice following the nuclear accident.

<日本語訳要旨>

福島原子力災害後に、深刻な差別やいじめが被災者を苦しめている。地震・津波といった自然災害では生じ得なかった問題である。初期の頃は、「放射能が感染る」という内容が主であったが、その後は「賠償金をもらって贅沢な暮らしをしている」という偏見が広がっていった。2025 年に我々が NHK と共同で実施した調査では、回答者 2,200 人のうち 56%が、避難者・被災者・原発事故の影響を受けた者として不快な経験をし、55%の者が原発事故によって避難・移住してきていることを、地域の人々に話すことに抵抗があると報告した。被災地の人々の分断と対立が大きな問題となっている。この現象の基礎には、東京オリンピック開催を機に原発事故は過去の出来事であり放射能汚染は無くなり安全になったとみなしていく社会の風潮が作られたことが関連している。本発表では、原発事故後の差別や偏見を引き起こした社会的構造を人類学調査から明らかにしたい。

Presidential Plenary

Saturday, October 11

1:15-2:15 p.m.

180 Hagerty Hall

Why Did Severe Discrimination and Prejudice Occur After the Fukushima Nuclear Disaster? Questioning the Underlying Social Structural Violence

Following the Fukushima nuclear disaster, severe discrimination and bullying have been tormenting the victims. This is a problem that usually would not have arisen from natural disasters, such as earthquakes and tsunamis. Initially, the main claim was that “radiation is contagious,” but later, rumors spread that “they are living luxuriously on compensation money.” We conducted a joint survey with NHK in 2025, and found that 56% of the 2,200 respondents reported having unpleasant experiences due to being evacuees or disaster victims. Furthermore, 55% reported feeling reluctant to tell local residents that they had evacuated or relocated due to the nuclear accident. The division and conflict among people in areas affected have become a major problem. This phenomenon stems from a societal trend that emerged around the time of the Tokyo Olympics, where the nuclear accident was treated as a thing of the past and radiation contamination was deemed eliminated and safe. This presentation aims to reveal, through anthropological research, the social structures that caused discrimination and prejudice against these victims following the nuclear accident.

Takuya Tsujiuchi

TAKUYA TSUJIUCHI, MD, PhD is a Professor at the Faculty of Human Sciences, Waseda University, and the director of Waseda Institute of Medical Anthropology on Disaster Reconstruction in Japan. After graduating from the School of Medicine at Hamamatsu University in 1992, he obtained his medical doctor license. He received a PhD (Medicine) in 1999 from the University of Tokyo’s Graduate School of Medicine, where he specialized in stress sciences and psychosomatic medicine. In 2013, he was a research fellow in the Harvard Program in Refugee Trauma (HPRT), Harvard Medical School, and Department of Psychiatry, Massachusetts General Hospital.

In 2014, he established the Waseda Institute of Medical Anthropology on Disaster Reconstruction (WIMA), and started organizing holistic research to evaluate medical (including mental health), socio-economic, and cultural issues that occur after disasters. In 2021, His oral presentation “*Severe Mental Health Damage Continues to Victims in The Metropolitan Area Due to The Fukushima Nuclear Accident; From Human Sciences Empirical Research*” was given the 20th Convention Society Encouragement “Excellent presentation award” by the Japanese Society for Traumatic Stress Studies.

以 上